



## 話題の本棚

ジェニ・ゴチョーク著、杉本拓監、若尾裕訳『実験音楽：1970年から現代まで』  
ロバート・バートレット著、大津祥子訳『燃やされた中世写本 ―破壊と継承の歴史―』

## 特集／真実

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: [http://www.s-coop.net/about\\_seikyo/public\\_relations/](http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/)



univ. 京大生協  
CO-OP

綴葉編集委員会

## 音楽で／を実験する

### 実験音楽

1970年から現代まで

ジェニ・ゴチョーク著

杉本拓監、若尾裕訳

フィルムアート社



ジョン・ケージという作曲家が作った「四分三秒」という曲がある。ご存知の方も多いと思うが、これはピアノの前で四分三秒間なにもせずただ座るだけの曲である。実験音楽の中でも最も有名かつ、よくネタとして受け取られがち——なこの曲は、のちの実験音楽に絶大な影響を与えた。なぜか。それは「四分三秒」が「演奏行為というものが、そこに立ち会い、そして聴取する行為そのものに置き換えられている」（一六頁）からにはかならない。つまり、曲を弾き、それを聞くという音楽の構造それ自体への挑戦が、「四分三秒」だったわけである。

ここには、歌のうまさや曲の構成の妙などの一般的な評価基準とはまったく無関係に受容・評価される領域の音楽というものがある。それが、本書のタイトルである実験音楽なのだ。

◆これを読めば実験音楽がわか（った気になれる）る？

「実験」や「現代」と頭につくものは大体そうだが、素人の我々には取っつきづらい。そもそも何をどう観たら／聴いたらいいのかもよくわからない（例えば、どの楽器に対しても同じ動作をするパフォーマンスを見て「ああ、これは楽器への身体のはたらきかけの等価性を主題としているのだな」と思い至れる者は素人ではない）。

本書は、そんな実験音楽を五つのテーマに分類し、そうした音楽が具体的に何をやっているのか、楽譜や写真を多用して説明している。素朴に驚くのは、世の中には、こんなに変な音楽をやっている人たちがいるのだということ。正弦波を鳴らすスピーカーをぶんぶん振り回したり（信じられないかもしれないがこれも音楽なのだ）、演奏するたびに曲が変わる楽譜を作ったり、ダンボールでオーケストラをやったり、ピアノ線を腕と脚につないでダンスしたり……と、みんなかなりの好き勝手にやっている。

誤解を恐れず言うと、実験音楽は大喜利に近い。出たとこ勝負なところも大きい。それになにより、本当にアイデアはなんでもよいのだ。重要なのは、その作品が既存の音楽に対して何を投げかけているかのだから。つまり、実験音楽は見た目よりも難しくないと、いうことだ。

◆実際にライブに行ってみよう！

……と、ここまで読めばわかるように、実験音楽というのは音だけ聴いてもあまり意味がなく（それはそれで楽しいのだが）、それを取り巻くパフォーマンスも込みで鑑賞しなければ醍醐味が充分に味わえない。ということで、百聞は一見にしかず、まずはライブに行くことをオススメしたい。嬉しいことに、京都には実験音楽のためのイベントスペースが充実している。左京区の〈外〉や中京区の〈URBANGUILD〉はその代表格だ（他にも、東京に行く機会があれば水道橋の〈Flam〉は外せない）。

みなさんもぜひ実験音楽ライブを！

（倉井）

（四三三頁 税込五二八〇円 1月刊）

## 失われたことすら知り得ないとしたら

### 燃やされた中世写本

—破壊と継承の歴史—

□バート・バートレット著

大津祥子訳

青土社



写本が失われるとはどういうことだろうか。例えば、あの『ペー  
オウルフ』が一七三二年の火災で焼失していたら——どこかの修道  
院で眠ったまま情勢変化によって散逸したり焚書されたり、はたまた  
バターや魚を包むのに使われてしまっていたら——英文学史がこ  
の童退治の物語から始まることはなかったし、ゲームや映画の世界  
で宝を守るドラゴンと出会うこともなかったかもしれない。

燃やされた写本の来歴を記す本書は、私たちが何を失ったのか、  
それはどのように失われたのか、そして何が残されたのかを示す。

◆破壊は易く——

そもそも写本は勝手に消えたりしない。写本がこの世から消えて  
しまふとしたら、経年劣化や自然災害、それか人為的な破壊である。  
例えば一三八一年、イングランドで起きた大規模反乱では、群衆  
が特許状や権利書を奪って火をつけた。貧しい人々は読み書きがで  
きず、支配者が大切に保管している「謎めいた羊皮紙」を、その支  
配の象徴を消し去ろうと破壊した。また一九四三年、連合国軍に降  
伏したイタリアでは、戦時の安全対策としてモンテサーノ邸にて保  
管されていた貴重な記録文書が一転敵国となったドイツ兵の略奪行  
為により屋敷ごと燃やされ灰となった。フランスのシャルトル市立

図書館にあった写本は、一九四四年のノルマンディー上陸作戦に先  
立つ空爆により黒焦げの断片となった。爆撃はいくつかのミスが重  
なった結果であったと記録されているが、避難させていた写本を軍  
事施設に近い図書館に戻すよう命じたのは占領軍である。記録文書  
の管理は近代国家の権限強化と結びつく。写本の破壊は、技術進歩  
による破壊力の増大と国家による暴力の結果であった。

◆修復は難し。

しかし本書は、復元するのをもまた人間であることを伝える。普仏  
戦争で破壊された彩飾写本『悦楽の園』は、数世代にわたる学者ら  
の尽力により永遠の喪失を免れた。破壊よりも前に写本の内容を記  
述していた人、挿絵を描き写していた人、当時最新の印刷術で写し  
を作成していた人がいて、そして破壊された写本の断片を拾い集め  
た人がいた。奇跡的にその存在を知られた写本は不完全ながらも人  
間の手により蘇る。複製や修復のための技術もまた進歩を続け、後  
の時代ほど復元の可能性は高まる。だが、それも人間が生きていて  
こそだ。人間を文化諸共破壊する現代にその希望はあるだろうか。

過去は「生み出すものである」、それも「今日存在しているもの  
から」だ。写本が失われるとき、私たちは、写本そのもののみなら  
ず、過去から繋いできたその来歴、関わった人々の存在、そして今  
後新たに発見されたかもしれないまた誰も知らないこと、つまり過  
去から未来にかけて写本が取り巻く全てを失う。ただかか一世紀存  
在するくらい人間が壊してよいものであるはずがない。(ひるね)

(一三三頁 税込三〇八〇円 2月刊)

## 〈特集〉 真実

奇妙な世の中になった。扇動的なデマやフェイクニュースが戦略的に用いられ、生成AIが実物かどうか見分けのつかない画像を量産する現代、真実は揺らぎ、争われている。視界のぼやけたこの世界を生きるために、われわれは今、真実とどう向き合っていくのだろうか。

(たいやき)



## 「正しさ」の暴力性

まずは科学の視点からこのテーマ「真実」を見てみよう。ここでは、フラットアース（地球平面説）や反ワクチンなどの陰謀論・科学否定について考える。科学対反科学のような構図なので、まずは科学というものを少し深掘りする。

### ■「科学」の本質

科学、というと何か特別な感じがするが、それはなぜだろうか。リー・マッキンタイア『科学的に正しい』とは何か（二）

ユートン新書）では、何が科学を科学たらしめるのかについて追究する。科学がどうかという線引き問題は昔から多くの哲学者が考えてきた。その中でカール・ポパーが反証可能性に着目したのは有名な話である。



著者は、科学の特別さは科学的態度、すなわち「経験的根拠を大切にする」「新たな根拠に照らして自分の理論を変える意志をもつ」という原則を忠実に守る姿勢にあるという。現在の科学界では、論文を出す際にデータを開示したり追試を行ったりしなければならな

いことが多いが、これはまさに科学的態度が実践されているということだ。

では本題に入っ  
ていこう。リー・  
マッキンタイア  
『エビデンスを嫌  
う人たち』（国書  
刊行会）では、科学的証拠を認めない人たちが何を考えているのか、どうすれば彼らと対話し、説得できるかが考えられている。ただ方法論を語るだけのものではない。著者はそういう人々と実際に対話しているのだ。



「フラットアース国際会議2018」に参加する場面から本書は始まる。

### ■科学否定論者は何を考えているのか

一般に科学否定論者が行う議論には五つの共通の特徴があるという。（一）証拠のチェリーピッキング。自説の補強に有利な証拠を取り上げる行為である。確証バイアスを知っている方なら分かりやすいだろう。（二）陰謀論への傾倒。信頼できる証拠がないものは特に厄介だ。（三）偽物の専門家への依存。チェリーピッキングの出版とでもいえるべきか。

(四) 非論理的な推論。算人形論法(相手の主張を歪めて引用し反論すること)や誤った二分法(二つの選択肢のみを提示して議論する)など沢山の方法がある。(五) 科学への現実離れした期待。僅かでも不確実性が残れば信頼できないと判断することだ。

これらのパターンは著者が潜入了た会議でも例外なく使われていた。ではそれを指摘すればいいのかというと、効果は限定的なようで、特にがちがちに固まった信念を持っている人には届かない。

### ■「正しさ」を振りかざしてはいけない

著者がフラットアース会議で気付いたことがあった。多くの参加者は人生に大なり小なりトラウマを抱えていた。絶望した時、「こうなったのは他人が自分を否定し、嘘をつき、傷つけてきたからだと考えた」とすれば、自分の現状を《巨大な陰謀論で説明すること》に魅力を感じないだろうか。フラットアースーたちの集まりはそういった人々の心の拠り所となっていた。彼らの信念の中心にあるのは証拠などではなくアイデンティティなのだ。《だからこそ彼らは、自分の信念に異議を唱えられると、それを自分個人に向けられた批判と受け取ってしまう》。となると、彼らを説得するにはアイデンティティそのものを揺

らす必要が出てくるが、それは難しそうだ。

しかし著者は絶望せず、解決策を主張する。事実や証拠は大事だが《適切な文脈で適切な人物によって提示されなければならない》。対面し、時間をかけ、敬意をもって何度も対話を重ねて相手の話をきちんと聞き、信頼関係を築くことで、信念の変化を期待できるかもしれない。革新的なアイデアではないがこ

## 真実、それでもなお

真実はいつもひとつ!——よく知られた名探偵の決め台詞だが、現実ではしばしば、たったひとつの事件に対して、いくつもの真実が成立する。出来事に対する認識はひとつによって異なり、世界はあまりに多様だ。そして人間は、その内側にも矛盾を抱えている。

真実のこうした複雑さに直面するとき、真実を知ること、伝えることは、必ず正当化されるわけではないとがわかる。幾つもの考えられる中からひとつを真実として語ることが、大いなる責任を伴うのだ。そんな「真実」をめぐる葛藤を描いた作品を紹介しよう。

### ◆真実を知ることの誠実

米澤穂信の《ペルーフ》シリーズは、元新聞記者で、のちにフリーとなるジャーナリス

れが唯一の方法だと著者は確信する。

我々はいわゆる科学否定論者の主張を一笑に付してこなかったか。科学というものを絶対視しすぎて冷淡になっていなかったか。無暗に「正しさ」をぶつけることは逆効果にさえなり得る。この問題の解決に近づくためには、皆が、人との向き合い方を考え直すなければならない。

(竹輪)

ト、太刀洗万智を主人公とする推理小説の連作である。彼女は当初、ボスニア紛争を題材とした青春小説『さよなら妖精』で脇役として登場した。大人になった彼女を描いた作品集『真実の10メートル手前』の短篇「ナイフを失われた思い出の中に」は同作の後日譚であり、作者によれば、シリーズの転機となる一作だった。



米澤穂信

《あなたはどのようにして、ご自分の仕事を正當とされるのですか?》——短篇の語り手、旧ユーゴから来日したヨヴァノヴィチは太刀洗にそう問いかける。ユーゴの崩壊を経験した彼は、戦地でメディアが果たした仕事に疑問を抱いていた。

数多の見方が存在するあの戦争に対し、記者たちは「真実」をあらかじめ用意していたのだ。読者の求める「真実」を伝えることが記者の仕事なのか。問いに答える代わりに、太刀洗は目下追っている事件で焦点となる、ある文章について話し始める。それは幼児殺害事件の犯人とされる少年が書いた、異様な内容の手記だった……。

太刀洗は、この手記がなんの加工もされることなく公開されたことを憤っていた。けれども、ジャーナリストの仕事とは、真実を明らかにする「目」ではないのか——問い返される太刀洗は、手記の文面を、思いがけない角度から読み解いてみせる。書かれた言葉をそのまま読む限り、それは見えてこない景色だった。「目」は見たいものを見る、と太刀洗は云う。ジャーナリストの仕事は、そんな「目」に徹することではないのだ。

幾重にも複雑な真実のうちから、太刀洗は「目」が見ていない、見ようとしらないものを掬い上げる。その仕事はたったひとつの「真実」を伝えるというよりも、別の視座を与えるようなものだろう。言葉を読み解き、言葉で伝える、痛々しいまでに真摯な彼女のその仕事ぶりは、収録作に一貫している。

#### ◆真実を伝えることの責任

そんなジャーナリスト、太刀洗万智の原点

が描かれているのが『王とサーカス』だ。ネパールを舞台に、二〇〇一年の王族殺害事件

を背景として据えた、堂々たる長篇である。

事件により緊張の増すカトマンズ。フリーになったばかりでたまたまその街に居合わせた太刀洗は、早速取材を開始する。事件当夜王宮に詰めっていた軍人と接触できたものの、後日、彼は殺されてしまった。発見された死体には傷文字が彫られていた——「密告者」と。彼は、自分のせいで殺されたのか？ この軍人との生前の会話シーンは、本作のテーマを明示的に語っている。《真実ほど容易くねじ曲げられるものはない。あるいは、多面的なものはない》と彼は云う。おまえはいいたいいかなる立場から、ネパールの事件を報道するのか。海の方こうの読者は、その



記事に触れたところで「サーカス」として消費するだけだ。読者は云うだろう、考えさせられた、と。《そういう娯楽なのだ》。

知ることは尊く、知らせることは気高い。

記者として、太刀洗はそう信じていた。けれどもそれが、悲劇をサーカスに仕立て上げることにすぎないとなれば。知ること、伝えることが、他者を傷つけるならば……。太刀洗は、苦悩しながらも取材を続ける。《何を書くか決めることは、何を書かないかを決めることでもある》。自らに降りかかった事件とも向き合いながら、彼女がくたす結論とは。

シリーズ名の「ペルー」は、マックス・ウェーバーの言葉に由来するという。「それでもなお」と云える者だけが、自らの仕事を天職にするのだ。そんな彼女に、作中、ある僧侶はこんな言葉を送る——《どうぞ心なさい。尊さは脆く、地獄は近い》。(水炊き)

## 物質の記憶から真実を立ち上げる

暴力が上陸する。数百人の軍隊が街に乱入する。その瞬間、街は痛みを記録しはじめる。権力による暴力、戦争での大量殺戮や破壊、

警察による拷問や殺害が横行する現代において、こうした暴力の存在はしばしば闇に葬り

去られる。しかし、瓦礫や弾痕、土壌や大気といった現場を構成する物質は、そこにいかなる暴力があったのかを憶えている。

建築家ヴァイツマン率いる研究機関「フォレンジック・アーキテクチャー（FA）」は

物質に刻まれた痕跡を収集し、権力による隠蔽された暴力の実態を明らかにしてきた。そもそも「フォレンジック」とは日本語では法



医学や科学捜査と訳され、司法の場で事実を検証するための技術を指す。FAはこの眼差しを逆転させ、国家が隠蔽した暴力を捜査する「カウンター・フォレンジックス」を実践してきた。『フォレンジック・アーキテクチャー 検知可能性の敷居における暴力』（水声社）には、これまでのFAの取り組みが大量の図版とともに記録されている。

#### ■物質性に記録される事実

FAは建物や都市空間、自然環境を、出来事を記録し続ける巨大な「センサー」として捉える。事件を記録するのは暴力を受けた身体やそれを撮影する市民だけではないのだ。壁に刻まれた弾痕の角度は銃撃の方向を、煙は爆撃の所在を示している。パキスタンでのCIAによるドローン攻撃は、密輸された現場の映像に残された壁の破片の跡——爆発の際に人体に破片が残ったことで壁に生じた人型の空白——から立証された。

しかし、物質が抱える事実の断片は常に明快的な証拠として現れるわけではない。現代の

暴力はしばしば「検知可能性の敷居」——証拠が識別可能かどうかの境界線——を利用して隠蔽される。例えば民間に公開される衛星画像の解像度は五〇センチに制限されており、パキスタンでのドローン攻撃で屋根に残された約三〇センチの穴は判別できない。しかしアメリカの軍事衛星は一五センチの解像度を持つ。この制限はプライバシー保護を名目とした安全保障上の規制によって定められている。このように権力は暴力を「検知可能性の敷居」の下へと周到に押し込み、真実を判別不能なノイズへと溶かしてしまふ。

#### ■真実を再構成する術

では、不可視の領域に埋没した断片をどのようにして拾い上げ、真実を紡ぎ出すのか。FAの活動の根底にある思想を論じた「調査的感性術 真実の政治における紛争と「モモンズ」（水声社）ではその方法論が示されている。

本書はその方法論の核心に「感性術<sup>エス・テクス</sup>」という概念を置く。この「aesthetics」は、一般的な美や芸術に関する定義から大幅に拡張されている。壁が弾痕を刻み、土壌が化学物質を吸収するように、人間ならざる物質もま



た環境からの刺激を「感知<sup>センシブ</sup>」する。物質は感知するが、意味を作らない。そうした人間と非人間の感知の連なりを読み解き、真実へと「意味形成<sup>センシティブ</sup>」するのが人間の仕事だ。この二段階の実践こそが感性術である。

FAはこの感性術を、フィールドからラボとスタジオを経てフォラムへと至る「建築的」なプロセスとして実装する。フィールドで収集された弾痕・証言・衛星画像といった断片的な証拠は、科学の眼を持つラボと、想像力のスタジオにおいて再構成される。事件現場を三次元のデジタル空間として復元し、収集した多様な情報を、時間と位置を精密に同期させて配置する。この仮想空間の中で断片が重なり合って、一つの物語へと「意味形成」されるとき、不可視化された暴力の全体像が立ち上がる。こうして構成された証拠は法廷や美術館といった多様なフォラムで提示され、権力が独占してきた真実は社会へと開かれていく。

フェイクニュースやAI生成画像が氾濫し何が真実かを判断することがますます困難になる時代に私たちは生きている。真実を理論的に問い直しながら実際のプロジェクトを実践し続けるFAの仕事は、かつてなく切実な意味を持つだろう。

（たいやき）

# 新刊コーナー

## 即興がつなぐ未来

音楽と社会の狭間でおとと

音遊びの会著

岩波書店



「音遊びの会」は、二〇〇五年に兵庫県神戸市で結成された即興演奏集団である。

大友良英やいとうせいこうなどの有名ミュージシャンも参加しているこの会の最大の特徴は、メンバーのほとんどが知的障害者であるという点だ。本書は、そんな「音遊びの会」のこれまでを、関係者による寄稿やメンバー（とその保護者）へのインタビューから追った一冊となっている。

会の発起人の沼田里衣は、神戸大学で音楽療法（音楽による心理的リハビリテーション）を学んだ。この療法では、ふつう治療過程で生み出された音楽はあくまで副産物であり、文化的行為と捉えることはあまり重視されない。が、「音遊びの会」は逆にそれを即興演奏として打ち出す。結果、そこから見えるのは音楽それ自体への深い洞察でもある。

当然ながら音楽にはいろんなルールがある。

一見自由に見える即興演奏でも、奏者は音の遊び方をガチガチに拘束されている。自由にやっているように見えてそんなに自由ではない——それが、即興演奏のジレンマなのだ。「音遊びの会」はそこに切り込む——それはそういうふうにいるだけじゃないの？と。真に音楽は誰にでも開かれていることを、「音遊びの会」は示している。

読後は、もし機会があればぜひ「音遊びの会」の演奏も聞いてみてほしい。次に、何が起こつてもいいような音楽がある、ということが自ずとわかるはずだ。

（倉井）  
（二三八頁 税込二七五〇円 12月刊）

## ワインとビールの考古学

小泉龍人著  
同成社



四月。新年度が始まる。先月は送別会でさんざん飲み明かしたものが、今月

もまた歓迎会やら何やらで、飲む機会も多からう。飲み会で最初一杯といえは生ビール。はて、われわれ人類はいつからこの飲み物に親しんでいたのだろうか。

本書はオリエントや地中海の古代世界において、ビール、そしてワインがいかに生まれ、受容されていたのかを探る。土器の形状、そこに付着した微量の物質、壁面に描かれた醸造の様子。考古資料は古代世界のワインとビールの諸相を鮮やかに描き出す。調査によると、ビールは五千年以上前に、ワインは八千年（！）ほど前には作られていた形跡があるという。ワインの歴史の方が古いのは、材料や工程がビールに比べて単純だからだ。現代の我々が日々飲んでいるそれと全く同じものではないが（古代のビールはアルコール度数が低かったようだ）、遙か昔から人類は酒を飲み、酔っ払っていたらしい。

もちろん、酒は飲んで楽しむだけでなく、儀礼に用いられる神聖なものでもあった。古代メソポタミアにはビールの女神ニンカシを讃える歌がある。ニンカシよ、あなたが槽からビールを濾して注ぎ出すとティグリス川とユーフラテス川のようにわき出てくる。この歌の中で語られるのはビールの製法であり、当時の酒造状況を知る資料ともなっている。

お酒の話をしていたら、飲みたくなってきました。ちなみに評者は白ワインが好きです。さて、それでは読者の皆さんも——

乾杯！

（荒砥）  
（二一〇頁 税込二二二〇円 2月刊）

# 古英語への扉 「音声DL付き」

藤井香子著  
大修館書店



数多の偶然が重なって後世に受け継がれた写本は、当時の言語がいかなるものであったかを伝えてくれる。無限の可能性を持つ言語に対して、資料である写本には限りがある。有限の記録から復元された古語の言語システムは偉大な先人たちの叡智の結晶にほかならない。日本語で書かれた最新の古英語語学書である本書もその一つだ。

古英語とは、アングロ・サクソン人がブリテン島に移住してから一〇〇年頃まで使用されていた英語で、英語母語話者であっても即時に理解するのは難しいという。だが我々にとっては現代英語も古英語も外国語であることには変わらない。一つ気楽に挑戦してみてほしい。これまで日本語の古英語語学書といえど、昭和六一年出版の市河・松浪著『古英語・中英語初歩』が長らく定番であった。そこに新たな選択肢として登場した本書は、伝統的な古語の文法書とは異なり、第二外国語の初学者向けテキストのように——細かい

例外は割愛、新出単語は日本語訳とともに提示、そして単元の終わりにには練習問題（とその答え！）を用意——構成されている。

もう一つの特徴が著者自ら吹き込んだという付属の音声。ネットで気軽に世界中が繋がる時代とはいえ、時空を超えて古英語母語話者とは繋がれまい。これまでも古英語音声が多かったわけではないが、ほとんどが男性の声であった。個人的な話をすると同じ女性の声での音読は発音を真似しやすい。ここでもまた新たな選択肢を与えた本書は、多くの人に「古英語への扉」を開くだろう。（ひるね）  
（一九四頁 税込二六四〇円 12月刊）

## マビノギオン

中世ウェールズ幻想物語集

中野節子翻訳  
筑摩書房



まず第一に、ウェールズの大地を舞台とする神話的世界として——魔法の丘の

頂に姿を現わす、どんな駿馬でも追いつけない白毛の馬に乗る貴婦人。宴の最中に外へ出れば雷鳴と共に霧が降り、次の瞬間には人も家畜も建物も、あとかたもなく消えている。

白昼夢のなかで訪れる黄金の城には、赤金の椅子に座す一人の乙女。花から創り上げられた美しい妻は、夫の命を奪おうと目論む。

第二に、伝説的騎士物語の源流として——「キルッフとオルウェン」をはじめ、アーサー王（アルスル）やオウアインといった人物たちが、神秘に満ちた戦の旅を繰り返す（アルスルとオウアインが両軍勢の戦を背景にゲーム（グウィズヴィズ）に興じる場面を夢に見る、という一風変わった話もある）。ほかにもカイ、ペレドゥル、グワルッフマイなど、後にいわゆる円卓の騎士として知られる役者たちの活躍もまた描かれている。

ブリテン島南西部に位置するウェールズの民、カムリ人の間で伝えられた伝承であり、ウェールズ語文化を代表する想像力の宝庫庫それが『マビノギオン』。バルズという詩人によって口承で伝えられてきたものが、十一世紀頃から修道僧らによって本の形でまとめられたという。その写本がウェールズとオックスフォードの図書館にそれぞれ収蔵されていた。この二種類の写本という箱舟のなかで、伝承の世界は形を留め息づいていたのである。神話的物語から騎士ロマンスまで、神秘と人間の織りなす十一の物語は、かくして今日もなお、読む者の心に魔法をかける。（猫足）

（六一九頁 税込一九八〇円 2月刊）

## 体の居場所をつくる

伊藤亜紗著  
朝日出版社



体は最も身近な他者だ。思うように動いてくれない、体との関係がままたらない。だから、体の声に耳を澄ませる。居心地の良い環境を模索する。本書に収められているのは、一人のパーソナルな試行錯誤の軌跡だ。体との関係も人それぞれ。ALS（筋萎縮性側索硬化症）やナルコレプシーといった病名がつく人も、原因不明の疲労感と付き合っている人もいる。同じ摂食障害でも三者三様。本書では、国籍やアイデンティティの問題も身体論の立場からアプローチされる。

体が突然動かなくなる、寝たきりで介助が必須——そんな状況の深刻さに比べて、本書から受ける印象はやわらかい。既存の医学的見解が通用するとは限らない、借り物の用語では説明できないからこそ、体の声と根気強く向き合い続ける。その結果得られた表現は、生活と身体感覚に根差していてみずみずしい。たとえば、過食嘔吐のことを高速道路に見立てて「胃まではセーフ。海ほたるみたいにな

たーンできる」。著者はその明るさとたくましさを尊重しながらインタビュー相手の言葉に耳を傾け、解釈してまとめ直す。本書はインタビューにたいする著者からの返事だ。著者は回復を「これまでの自分ではない自分を発見すること」と定義する。単線的な生活にふっと現れるあそびや期待や思いがけない出会い。それらが、原因を取り除いて元の状態に戻すという凝り固まった図式を分解していく。だから居場所は、見つけるのではなく、すのでもなく、つくるものなのだろう。

(三二二頁 税込二〇九〇円 2月刊)

(くたくた)

## 自由と平等

「正義」のための設計図―

ダニエル・チャンドラー 著

鬼澤忍訳 早川書房



二十世紀最大の政治哲学者、ジョン・ロールズ。彼の代表作の『正義論』は、

現代まで多くの哲学者に影響を与えてきた名著である。本書は、自由と平等に立脚した彼の政治思想をわかりやすく解説しながら、現実の政治にほとんど影響を与えてこなかった

彼の理論をいかに現実の政治実践で実現することができのかに着目している。彼の追求した「民主主義を再び活性化し、経済を変革する包括的なプログラム」を実現するために我々は何をするべきなのかについて助言する。彼が目指していた現実的なユートピアとは、人間の持続可能性と不平等の是正、そして基本的自由の尊重を指す。つまり、すべての人が基本的権利と自由を尊重し、人生において平等の機会を持ち、さらに将来世代に対する持続可能性に基づく実践をすることを指す。

そして、ロールズが十分検討するに至らなかった政治的实践についてのアイデアも示されている。例えば選挙について。民主主義政治と資本主義の腐敗に直面した人々が、反自由主義・権威主義的ポピュリストへ傾倒していることを問題視する。『正義論』を体現できる革新政党と中道左派政党、それが他の主要政党とどのように異なるのか。そしてなぜ投票者の票が割れるのか。現在の政治的なトレンドも含めて説明される。

今までもユートピアが現実になってきた事例はある——奴隸制からの解放、普通選挙権など。多くの人が現代民主主義に絶望を感じ、中、また今はあきらめる局面ではないというところを改めて気づかせてくれる。(フランチ)

(四八〇頁 税込四四〇〇円 2月刊)

## 置き配的

福尾匠著  
講談社

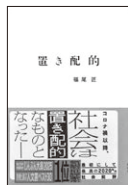
荷物の直接の受け

渡しではなく、「届けた」という情報の共有をもって配達が

完了する置き配というシステム。それはメッセージ（発言内容）がメタデータ（社会的な属性や立場）の闘争に飲み込まれる現代のSNS空間とよく似ている――

批評家・福尾は、この語をもって（柄谷の交通空間／東の郵便空間を想起してほしい）現代のコミュニケーションの変質に切り込むとする。出口のないアイデンティ・ポリテイクス、プラットフォーム資本主義。冷笑に絡め取られて空転する言葉たち。

曰く、置き配的な社会とは、コミュニケーションを偽装した内向きのパフォーマンスに満ち、誤解可能性を梃子にしたパフォーマンス・イビティの押し付け合いに溢れている。沈黙すらも一つのパフォーマンスとして回収され、私たちの言葉は暴力的なほど平等で（密）な空間に囲い込まれている（思えば置き配の流行のはじまりもコロナ禍だった）。



近年の言葉をめぐる息苦しさには私も辟易しているし、それだけに彼が糸口として示す〈疎〉の重要性にはいたく共感した。密室では息を続けるには隙間風が必要なのだ。沈黙を沈黙のままに、他者を他者のままに受け止める空間でこそ、私たちは出会い直せる――だからこそ、本書で豊かに展開される議論を支え切るには、「置き配的」という言葉はややパフォーマンスタイプにすぎるような印象も受けたが、そうした感想すらも福尾は織り込み済みなのだとして、私はもう「沈黙」するしかない。

(二四〇頁 税込三二〇円 11月刊)

(浅煎り)

## 囚人のジレンマ

リチャード・パワーズ著  
柴田元幸 前山佳朱彦訳  
河出文庫

個人と全体はいかなる関係を結んでいるか。現代アメリカ文学の異オリチャー・パワーズの小説に一貫しているのは、この問いである。時代や環境がいかにして個人をつくり、個人はそれらをどう変えられるか、パワーズは書き続けてきた。このたび文庫化

された初期作である本書も例に漏れない――《教えてよ父さん、僕らはどこまで自由なのか》。歴史教師だった父親と子供たちとの問答を通して、パワーズはアメリカ中西部の一軒家に戦争の記憶、大きな歴史を持ち込む。

タイトルの「囚人のジレンマ」はゲーム理論の用語のひとつで、各々が利己的な選択を取った結果、全体にとっては望ましい状態にはならないことをさす。世界全体がこのジレンマに陥り、相互の信頼を失ったとき、個人に何ができるだろうか――ひとりで世界は救えない。しかし、それでも本書は希望を語ろうとする。《世界は無数の人間ではない。一人、一人、一人、その足し算だ。それら一人ひとりが放棄し始めるまでは、袋小路にはならない。そして、もし彼らが、ほかの人たちの善意とつながりを保つなら、放棄する必要も生じない》。そこで出番となるのが、フィクションである。それを通して《一人の人生、きみの人生が、それに触れる人生すべてをいかに変えるかを示すんだ。見た目にしたがってではなく、信頼にしたがって歩むかぎり、ゲームをつづける価値があることを証明するんだ》。説教臭いだろうか。しかし評者はこの一節に、何度も勇気を与えられてきた。

小説は、ひとを救うのである。（水炊き）

(三五六頁 税込一四三〇円 3月刊)

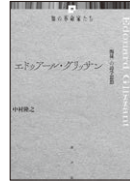
## 《知の革命家たち》

## エドゥアール・グリッサン

## 〈関係の詩学思想〉

中村隆之著 水声社

このご時世にとん

でもないシリーズが  
開始された。その名  
もへ知の革命家た  
ち。広告を見ると「二十世紀欧米の文学・

芸術・人文科学の諸分野において革新的な役割を果たした人々についてのモノグラフのシリーズ」とある。(欧米限定なのはどうかと思いつつ) 痒いところに手が届く人選に思わず唸る。ミシェル・ビュトールに、エル・リシツキーに、ロマン・ヤコフソンにと、そこに並ぶ名前は少しマニアック。しかしそれがいい。

本書もまたこのシリーズのひとつ。革命家の名前はエドゥアール・グリッサン。カリブ海のフランス領マルティニク島に生まれた作家・詩人・思想家だ。奴隷として虐げられてきたカリブ海の人間として彼が目指すこと、それは西洋の近代的知を根底から揺るがすことにはかならない。普遍、真理、存在、唯一神——そうした「へ」を原理に据えてきた西洋にたいして、グリッサンが掲げるのは〈関

係〉である。主体と客体を明確に区分すること、人間を中心に据えて思考を展開すること、それをグリッサンは断固拒否する。

彼が行き着くのは、非人間的なもの——動物や植物といった「自然」、あるいは種々様々な「モノ」——も含めて世界全体を考察する地点、すなわち〈全・世界〉と彼が呼ぶ地点である。人間と人間の、人間と非人間の、非人間と非人間の織り成す〈関係〉として世界を認識すること、そこに彼の主眼がある。そしてこの〈全・世界〉の思想に触発されて新たな思考を展開した思想家こそ、アシル・ンベンベにほかならなかった。(ばや)

(一六六頁 税込一九八〇円 2月刊)

## 地球共同体

## 最後のユーロピアについての考察

アシル・ンベンベ著

中村隆之／平田周訳 人文書院

アシル・ンベンベ

——カメルーンに生

まれた彼は、現在最も注目を集める思想



家のひとりである。彼の思想の到達点とも言える本書、そしてその中心概念である「地球共同体」は、グリッサンの〈全・世界〉の思想を受け継いだものだった。カリブ海からア

フリカへ——世界を動かす知は、今、西洋とは異なる地点で創造され継承されている。被抑圧者、被植民者、奴隷として世界の暗部に追いやられてきたアフリカの人びとやアフロ・ディアスポラの思想——それを抜きにして、これからの思想を語ることはもはやできない。

では「地球共同体」とは何か。それは非人間的なものも含めた共同体のことである。動物や植物、大気や土壌、果ては機械やウィルスまでも含めて、ンベンベはあり得べき共同体のあり方を模索する。そしてそこで彼を印づけるのは「地球を去り行く者としての人間」という考え方である。人間は地球の支配者でもなければ所有者でもない。その地球での束の間の滞在のなかで、人間はほかの非人間的な存在者とのような関係を結びながら生きていけばいいのか／生きていかざるを得ないのか——ンベンベはそれを、古代ドゴン族の教習やアニズムの知恵——非西洋的なアーカイヴ——にも依拠しながら考え抜く。

「人新世がグローバルノースからの危機意識であるとするれば、地球共同体とはグローバルサウスからのそれである」——「記者解題」でそう語られるように、本書にはアフリカという土地に根ざしたンベンベのうねるような思考が非常に密度で凝集されている。(ばや)

(二二〇頁 税込三〇八〇円 1月刊)

# 現代戦争論

—ロシアウクライナから考える世界の行方

小泉悠著 ちくま新書

2022年2月24日に、ロシアによるウクライナ侵攻が始まってから四年が経つ。プーチンにより「特別軍事作戦」と銘打たれた——つまり「戦争」ではなく「昼夜のうちに完遂される電撃的な占領とみなされていた——この侵略は泥沼化し、現在にいたるまでおびただしい数の犠牲者を（露宇双方に）生み出し続けている。なぜこれほどまでに長期化したのか、戦時下の国では何が起こっているのか。これに軍事・外交的観点から一つの視座を与えようと試みるのが本書である。

現在進行形で起こっている戦争。情報は錯綜し不確実なことも多い。そのような制約のなかで本書は手に入りうる様々なデータからこの戦争の輪郭を辿る。それは時として手探りの作業となるが、だからこそ、リアルタイムの分析として存在感がある。さらにいえば、これは決して遠い「どこか」のいざ、（旧ソ連地域の紛争）で済む話ではない。冷戦後の安全保障や国際秩序の、つまり二一世紀の世界全体の在り方に関わる問題である。当然、その構成員たる日本も例外ではない。（猫足）

（二七三頁 税込二〇七八円 2月刊）

# ナショナリズムとは何か

帰属 愛国、排外主義の正体

中井遼著 中公新書

愛国主義、排外主義といった「ナショナリズム」的な言説が耳目を集める今日。しかしそもそも、ナショナリズムとは何か？ 明確に定義することは難しいが、本書ではそこに含有される三つの要素（帰属意識、愛国心、排外思想）に焦点を当てて実証的に分析する。

例えば愛国心について、経済格差が広がり人々は愛国的感情を持つ傾向にある。これは貧困層が拠り所としての「国家」を見出すからだ、と理解されることがある。しかし、経済格差の大きい国では富裕層も愛国的感情を持つ傾向にあるため、この図式では説明できない。原因として指摘されているのは、政府が経済格差の問題を覆い隠すために愛国心を煽る傾向があるということだ。本書は他にも我々が抱きがちなイメージを修正しつつ、ナショナリズムが高揚する要因、紛争と戦争と結びつく条件などについて探っていく。

ナショナリズムは時に階級や身分を横断して人々を包摂する原理にもなる。その正負の側面を正しく見つけることが、分断や悲劇を避けるための着実な手立てとなろう。（荒砥）

（三〇四頁 税込二二〇円 11月刊）

# 読書思考トレーニング

—AI活用でデジタルにアウトプットする技法

中崎倫子著 ちくま新書

この春から一回生向けの非常勤講師をいくつか担当することになった。AIがこれほど身近な時代にいかに学問に触れてもらうのか夜中にヒーヒー言いつつ授業資料を作る生活のなか、ふと目に留まったのが本書だ。

内容は至ってシンプル。「思考を伴う／伴わない」×「直近のアウトプットが必要／不要」という軸に沿って読書という行為を分類すれば、思考・情報・教養・娯楽という四つの目的が得られる。これらの目的によって本の読み方と選び方、記録やアウトプットの仕方も異なるというわけだ。至極当然な話ではあるが、全ての本を頭から通読する必要はなく、AIを頼りながら読み進めてもよいと聞けば気が楽になる方もいるだろう。AIとの対話は読書メモの役割も果たしうる。思考形成に資するのならば、その過程は自由である。さて、授業資料の作成という目的を求めた私にとって、本書は十分な情報（「実用性」）を備えていた。それぞれの生活と本との向き合い方があり、正解はない。目まぐるしい新生活のそばに、読書の彩りを。（浅煎り）

（二九三頁 税込二〇五六円 2月刊）

# 昭和初年代の閃光——日本のモダニズム文学を読む

ひとつの終りが、ひとつの新しさを用意する——「そうして、終に、死は、鮮麗な曙のように、忽然として彼女の面上に浮き上がった」(「花園の思想」)。臨終がまた曙であるように、関東大震災が江戸の名残を二掃し、東京が大都会へと移り変わりつつあった頃、文学もまた近代のその先へと向かおうとしていた。欧米におけるモダニズム文学に同期して日本文学を革新しようとした横光利一のこの一節は、レクイエムであると同時に新時代の宣言でもある。岩波文庫版の短編集『日輪・春は馬車に乗って』は、横光の技法の多様性を味わうのに最適だ。

例えば「春は馬車に乗って」ではことばが認知を一新する——「水平線を狙って海面に突出している遠くの光った岬」。「機械」では意識の相互作用への意識、という循環構造を息もつかせぬ文体が美演する——「前には私は幹部からそのように疑われたのだが今度は自分が他人を疑う番になったのを感じると、あのとき幹部をその間馬鹿にしていた面白さを思い出してやがて私も屋敷に絶えずあんな面白さを感じさすのであろうかとそんなことまで考えながら、一度は人から馬鹿にされてもみなければとも思い直したりしていよいよ屋敷へ意識をそそいでいった」。「日輪」では太古の夢が絢爛たる色使いの中に浮かび上がる。「卑弥呼の足音が高縁の板をきしめて響いて来た。(…)薄紅に染った秋の花壇の上には、霧の途中で数羽の鶴が舞っていた。そうして、朝日を背負った一つの峰は、花壇の上で絶えず紫色の煙を吐いていた」。



これらの作品は十五年戦争の遠い雷鳴のもと、日本が世界の最前

線に伍した、一瞬の幻なのだ。



新しさを求めたのは何も横光だけではな  
い。自動車、デパート、ジャズ、カフェ、  
ラジオが現れ、人々の生活が変わりつつあ  
った時代、その風俗を写し取った作家たちが居た。今では忘れ去られ  
たモダニズムの粹を集めたのが『疾走! 日本尖端文学撰集』だ。そ  
の切先鋭さは、実例を見てもらうのが一番早い。以下に引こう——  
《冬の都会は、午前二時の、暗闇だ。悶絶した隧道だ。雪雪雪雪雪  
雪雪雪雪の交錯雑踏を縫い、自動車は、機械の匂いを撒きながら、  
ひたすら、驀進した。……》(「首」)

《都会は高速度のオルケストラ・バンドだ。変転としてきわまりなき急アンポをもって、一切の記憶と表情をかえて行く》(「新宿風景」)  
《街はひどい霧でね、その中にけたたましい電車の鈴です自動車  
の頭燈です。光りが廻ると、その輪の中にうようよと音もなく蠢く、  
丁度海の底の魚群のように、人、人、人、人、……》(「橋」)

おわかりいただけるだろうか。ここで起きているのは書き方の転  
換なのだ。安定した対象としての外界から、認識の混沌へ。呆然と  
する速度で変わりゆく都会が、名詞の枠を突き破って脳髓に流れ込  
んでくる。なによりもまず、速度、速度、速度、速度を!

しかし、気をつけなくてはならない。疾走する速度は、急激な復  
興と繁栄は、癒し難い歪みの上に打ち立てられたものでもあったの  
だ。——そして、文学はその一面も確かに捉えていた。(「コーク

## 技術の功罪——プロレタリア文学を読む

絢爛たる都会の一角、例えばデパートに積み重ねられた紅茶缶。

「それは英領セイロン島の、製茶労働者の組織的工率から産出されたものだった。赤道圏内烈日の下、広大な茶園に茶を摘む籠をつけた黒人農婦の群。工場へ向う運輸馬車の長い列。熱風によって茶葉を萎凋させる労働。(……) 仕上げられた製品は百伍入五十伍入となつて、ボンベイ航路のT級貨物船に積載される。船側に引いた船級協会の安全マークは、見る見る水面とカスカス沈む。沸騰する油のような印度洋の暑熱。マラリア熱に罹れる船員。あり合せの箱に収めて沈める簡単な水葬」(鈴木清次郎「人間売られた」)。

例えば、新聞の活字ひとつひとつのために鉛毒に侵される植字工がいるかもしれない(山路英世「印刷工の歌」)。例えば、今歩いている廊下は、粉々になった誰かの血と肉が混じったセメントでできているかもしれない(葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」)。プロレタリア文学は、大都会の速度が振り落としてきた悲惨な過程を浮き彫りにする。

一九一七年に起こったロシア革命の追い風を受け、一九二二年に雑誌『種時く人』が創刊されてから、開戦の兆しが見え始め治安維持法による弾圧が激化するまでの十余年、プロレタリア文学は戦間期の一大潮流となった。政治性や時代性が前面に出るあまり芸術性に乏しいと批判されることもあり、現代の読者からすると手を伸ばしにくいこれらの作品にとつて、**棚沢健**『だからプロレタリア文学』(勉誠出版)は格好のブックガイドになる。「プロレタリア文学とは何かを、

『文学史』や『運動史』の観点からまとめ解説



した文獻はすでに数多くあるが、作品や表現や手法の面から光りをあてたガイドや文獻はほとんど存在しない」と問題視する著者が、作品の本文や読みどころを解説する。例えば左のような力強い表現「尊い人間の生命を等閑にしたのは、どいつだ!」

「だがね、生きてると何か役に立てないこともあるまじ」「そして、彼等は、立ち上った。——もう一度!」

プロレタリア文学はひたすら速度を追い求めてきた時代へのアンチテーゼを高らかに歌い上げる。それは大都会の美に覆い隠されない労働者たちの現実を真正面から見つめることに他ならない。

一方で、プロレタリア文学は技術を逆手に取る図太さも兼ね備えている。荒木優太編「プロレタリア文学セレクション」(平凡社ライブラリー)は「言葉の技術」を軸に編まれたアンソロジーだ。例えば、印刷技術は多くの読者に平等に言葉が届けることを可能にした。「プロレタリア文学は特権的な著者や読者に囲まれず、すべての人々に自らを開くこととする」。だから本書には、文学史にその名を刻むような作品だけでなく、読者投稿欄、パンフレット、または作者名が伏字となった詩まで収録されている。技術が人間を一個の道具と化し、人間性は剝奪された社会。しかしだからこそ、読むこと／書くことはすべての人に開かれ、連帯を促す。

急速に大都会へ変貌する時代の歪みから芽を出しながらも、モダニズムと同じ土壌の養分を吸い、たくましく瓦礫を持ち上げて成長し開いた花——それがプロレタリア文学なのである。(くたくた)



## 編集後記

「空にある星を一つ欲しいと思いませんか？ 思わない？ そんなら、君と話をしない。」

坂口安吾の文章でいちばん好きな一節です。この春に大学を離れ、あわせて2年間お世話になった『綴葉』編集委員会ともお別れになります。私にとって大学は「空にある星に手をのばしてみてもいいんだ」と思わせてくれた場所でした。周りからいくら笑われても馬鹿にされても、屋根の上で夜空に向かって一心に竹竿を振り回す人の姿は、人からどう思われるかばかり気にして「こうあるべき」と自分に呪いをかけていた私の心を自由にしてくれました。

『綴葉』の誌面も、そんな自由でひたむきな言葉があふれていると思います。だからこそ毎月の編集会議が楽しく、離れがたい居場所でした。読者のみなさんにとってもそうであることを祈ります。

とはいえ原稿にはいつも苦しめられていて、毎月締切直前に泣きながらパソコンに向かっていました。くたくたを通り越してぐだぐだになっているときはかりでしたが、少しでもみなさんの読書生活に寄り添うことができていたら光栄です。本当にありがとうございます。（くたくた）

## 当てよう！ 図書カード

今回の企画では昭和初年代の日本文学を表する二大潮流について扱いました。そこで問題です。僕が紹介した作家、横光利一の初めての長編は何というタイトルでしょうか？

1. 『家族会議』
2. 『上海』
3. 『微笑』
4. 『旅愁』

（コーク）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは5月15日です。



《12月号の解答》 12月号の問題の正解は、1.の世羅でした。京都駅伝の日には京都中の道路が封鎖されます。自転車を主な機動力として京都中を徘徊する京大生もこれには無力。アルバイトに遅刻するわけです（実話）。図書カードの当選者は、たまこさん、いぐあらしさん、冷奴さん、いわさん、ミスミソウさんの5名です。当選おめでとうございます。（浅煎り）

## 読者からひびく

○まだ読んでいないのですが、若きウェルテルの悩みに挑戦しています。短い、読みやすい、など、挑戦しやすい古典の特集があると嬉しいですね。（医学部・たまこ）

——短くて読み易い作品は古典文学への最良の入口。ここで簡単に挙げるなら『フランケンシュタイン』『地下室の手記』『はつ恋』『外套』『鼻』『イワン・デニソヴィチ』『砂男』『みづうみ』『デミアン』……個人的にはブルガーコフが超・おすすめです！

○山で育ったので海の特集が新鮮でした！

（大学院生・冷奴）

——一つの地理的空間の様々な側面が浮かび上がってきますね。山特集なら、と少し考えてみたものの、『魔の山』と『狂気の山脈にて』しか思い浮かびませんでした……。

○オーストリア綺想コレクションなど、とても面白そうなのに書評を読まなければ絶対自分では見つけられないような本を知ると、とても嬉しくなります。（防災研・ミスミソウ）

——畢竟、書評を書くことの意義はそこにあるように思います。「そんな本が！面白そう！」と思って頂けるような書評をお届けできるよう、今後も努めてまいります。（猫足）